

偽物談議

森田亀之助

○偽物談義

これは東亜ペイント株式会社の機関誌「ペイント」第二〇号（一九六一年十月）に寄稿したもので、丁度その頭、本文中にもあるように、永仁の壺問題が賑やかであった。その後も、栃木県佐野から新発見の乾山についての真偽が騒がれたりしました。然し、偽物、本物の問題は、美術、骨董界にはいつでもあるもので、ジャーナリズムで問題になつたりするのは特別な場合、事実は日常茶飯事です。ですので、いつ読んで頂いてもよいと思います。

◎先頃新聞や週刊誌等にも盛んに取り上げられた永仁銘瓶子の問題というのがありました。その概略を申しますと、去る昭和34年6月27日付けで、鎌倉時代の作品として、重要文化財に指定された永仁2年銘の古瀬戸の瓶子が、その後、真偽について疑いをもつ意見や、その上、『あれは自分が造つたのだ』という人まで現われ、世間がうるさくなつたので、文化財保護委員会でも放つておけず、改めて慎重な調査を行つた結果、この瓶子と、他2件の作品（古瀬戸黄釉蓮花唐草文四耳壺一口一昭28.3.31日指定、古瀬戸狛犬2軀一昭20.2.2指定）、都合3点が指定解除となつたのであります。

国の文化財保護委員会、ことにその専門委員会としては黒星で、権威上余り感服すべき話ではありませんが、こんな鑑定 of 誤りなど、残念ながら、そう珍らしいことではない。ずいぶん昔のことになりますが、故笹川臨風博士が浮世絵屏風で贋物屋に一杯喰わされたことなど、覚えている人もたくさんあるでしょう。

また、これは本年2月末、米合衆国で公けになつた贋物事件ですが、永仁瓶子事件に似ているのみか、ことが大がかりで、舞台も大きいので、興味がありますから、大体を紹介します。

ニューヨークのメトロポリタン美術館といえば、世界的に知られている美術館であることは皆様も御承知のこと。ここの一室に、過去30年間も、名物とし陳列されていた、古代エトラスカ等の等身大彫刻が3体ありました。エトラスカ民族というのは、古代ローマ民族以前



挿絵(1) "タイム" 誌から転載

に、イタリアの中部、古名エトルリアという地域を中心として、勢力を張っていた民族で、その遺跡遺物も相当ありますが、メトロポリタンのものは戦士の像で、この種のものでは一級品だと折り紙を付けた学者もあつたそう、従つて年代も2,300年以前のもものと信じられていました。(挿絵(1)参照、米週刊誌「タイム」1961.2.24日号)それを、今度いよいよ美術館自体が、贋物であつたと発表、自発的に撤回することになつたのです。どうしてそういうことになつたかは、後に説明します。

◎一口に贋物、偽物といつても、俗にいう、ピンからキリまであります。どうしてこんなものに騙されるかと思ふに不思議に思う位、噴飯的に幼稚なものもある半面、精巧なものになると、立派な専門家もしばしば欺かれる程のものもずいぶんあります。ここに雪舟筆と落款した達磨

の掛け軸があるとす。私など観ると、真物としてさしつかえないと思う。ところが、観画経験を積んだ人はいけないという。これは、画風に就て細かい観察もあつてでしようが、大体は雪舟の達磨などは世にたくさんあり、それというのが、昔、雪舟の流れを汲む—いわゆる雲谷派の画家たちが、注文によつて、多くの達磨を描いたことを知つており、また、多分その原本となつた真の雪舟達磨を観ているからでしよう。これに類することは西洋にも随分あります。実例は際限ありませんから、その中、だれでも知つている名匠ラファエルの場合をとると、ラファエルの師匠はペルジイノですが、この人の画室はむしろ製造所といつてよい位、ペルウジアの本拠以外、方々に出張所まであつて、そこでできたものは皆、ペルジイノ作として出される。しかし、製作者は弟子たちが主である。ですから、弟子が独立しても師の作風に酷似しているのは無論です。古人は今の芸術家のように、そんなことは余り問題にしていなかつたのです。ですから、ラファエルとペルジイノのいずれの手に成つたか、美術学者の頭を悩ます作品があつても当然です。しかも、そのラファエルがまた、おおぜいの弟子——ヴァサリという伝記著者の説では50人余もおつたというが、それらが、やはり師匠そのままを理想として仕事をする事になると、全く美術史家泣かせです。その他、同一作者が、同一作品を重ねて作ることもあります。それをプレリカと言いますが、仏国ルーブル

美術館、及びロンドンのナショナル・ギャラリーにあるレオナルド・ダ・ヴィンチの『岩間の聖母』など、いろいろ議論もありますが、その例です。

支那などでも古くから、大家を模したり、その筆意に倣うなどは、悪いことではなく、むしろ、大家に対する尊敬、私淑の意を表するものとして、良くその風格を伝えれば、賞讃される位のものであります。

ただ、そんな技倆を種にして暴利を貪る手段とするとき、悪質な贋物屋となる訳ですが、不幸にして、後世になるほど、この種の人間が増加して来たことは事実です。もつとも、なかには、善意か悪意か一寸判断しにくい人もあります。それらの人は、皆技術家として優秀であるから、自家独自の作を発表しておれば問題はないが、研究心からか、学者先生を笑つてやろうといういたずらか、写し物を造る。写し物を造ろうと、何を造ろうと、それは作家の勝手であるが、現代、個性の尊重される時代においては、はつきり署名すべきである。外国でもわが国でも、かような作者の存在を私は知っています。大体悪いことをするのは、これら作家のものを仲介する美術商や骨董商に多いのであるが、しかし、実作者の名を入れない方が、より高価に引き取られていう事実には、作者が気の付かぬはずはないと思います。

金儲けを主とする、意識的な本当の贋物屋は、芸術的良心などないから、種々破綻ができて、すぐ観破できるだろうと、考える人もあるかも知れませんが、どうして、そんなものはありません。それは商売だから簡単な安物も作りますが、念入りのものになると、製作者も優秀な技術家で、しかも、狭い部門を専門的に研究しており、また資本も相当かける。学者先生が研究を深めれば、それで襤褸を出さぬどころか、その裏をかくように勉強することは、丁度、戦争の攻撃兵器と防禦兵器の競争の如きものです。2,3冊美術書を読んだ程度で、眼の利かぬ若い先生では、とても歯は立たない。

◎真贋の判定にはどんな方法が用いられるか。まず、従来主として行われ、今でも鑑定を中心をなしているのは、様式や作風からの判断で、いわば、感能的、主観的方法とでもいうもの。これに対して、客観的方法とでもいうべきものがある。紙・布・板・顔料の古さとか、すべて材料に関する事、及び作品の由緒というか——伝承の歴史の調査など、それですが、なおこの他に、X光線・赤外線の使用、先日、永仁瓶子に利用された位相差



挿絵(2) "タイム" 誌から転載

顕微鏡等々、種々、純化学的方法なども客観的方法に含められるでしょう。どの方法も無論一得一失ありますが、しかし作風からの判断は、簡単なせいも、眼の肥えた鑑識家の場合、案外役に立つことが多い。他の方法も適当に援用すれば、真偽確定に有力なことはもちろんです。以上いろいろの方法中、ただ一つで鑑定上の極め手となり得るのは、由緒・伝来が正真正銘一点の疑も容れない場合です。永仁瓶子も一例で、加藤唐九郎父子の陶芸家が原作者だと名のり出た時に、真偽は大体決定したので、後の科学的調査は確認の申訳であります。

◎メトロポリタン美術館の贋物も、次の経緯で正体が判つたのです。ボストン生れで、現在87才になるハロルド・ウッドブリー・バアンスという人がある。この人はハーバード大学で科学を学んだ後、美術研究に転じ、生涯の大部分を合衆国美術館のために、欧州美術品購入に働いたのであるが、かねがねこのエトラスカ戦士像の作風に疑いをもっていた。引退して伊太利ローマに住むことになって、2年越し、この彫刻の究明を心がけていた。ところが、丁度同氏と同年配のアルフレッド・フィオラヴァンチなる男で、古美術品や宝石飾りの修理で生活しているものの噂をしじう聞くので、遂にこの男と懇意になり、彼から次の話を聞き出したのでした。

このフィオラヴァンチは60年ほど前、姓をリツカルチという兄弟に近づきになったが、この兄弟は古美術商に頼まれて古代陶器の修繕をやっていた。フィオラヴァンチは元々仕立屋であつたが、リツカルチの仕事に興味を覚え、この兄弟の工場で働くことになった。そこで彼ら3人は、古代美術品の修復ができるのだから、破片・断片から纏つた作品を造り出せぬ訳はないと考え、始めは破片を集めて、古代小品の製作をやつたところ、これが悪徳商人の間に受けて大いに当つた。それでいよいよ1914年に問題の戦士像に取りかかつたのであります。それぞれ然るべきお手本があるのですが、ここでは略します。ただ彼らの工房には等身大の彫刻を焼く窯が無いので、陶土で造つたものを一度壊し、その破片を焼成した後、尤もらしい汚れや古色をつけて、或る骨董屋（現在故人）に売つたという。骨董屋は少くとも一体で4万弗はつかんだということです。このような贋物屋は、洋の東西を問わず随分おります。屢々美術研究者よりも道具屋の方が鑑定が的中することのあるのは、贋物製造所や製造人を知っているからです。この頃流行の埴輪なども、ものがものだけに、ご用心が肝要です。も一つ、鑑定上面白い例を挙げましょう。話は1949年に遡ります。米国のウィリアム・グエルツという金持ちが、ヴァン・ゴッホの『蠟燭光での研究』という作「(挿絵(2)参照, 1949.12.12発刊(タイム)」を購入し、持っていました。この作の真偽に就て、欧州の権威

者間に意見の一致をみなかつたので、その頃、ゴッホの総合展覧会を開いていた米国メトロポリタン美術館は、国内屈指の権威者を集めてこの絵を鑑査させた。その結果公表された報告では、「与えられた時間内には徹底的分析研究は不可能であつた」から、「十分誤謬もあり得ることを自認する」という前提の上での判断では、この肖像画はゴッホ展陳列品に比して疑わしいと思われるほど拙劣に見える。『色彩はギゴちなく、素描も弱く、頭部肉付けも不確実である』ということでした。そんなことで、売つた画商は、買い戻してもよい（値段は50,000万弗位だと噂されていた）と申し出たが、所有者はそれにかまわず、とにかく一応、原品を欧州に還し、再度米国に輸入することにした。真偽次第で当然関税額も違うから、鑑定については、税関—即ち米国大蔵省に下駄を預けることにした。だから今度鑑定は美術専門家でなく、大蔵省の探偵官—調査官—というか—そういう役人の仕事となつた訳です。その結果はどうかというと、まず、絵の古さは少くとも60年はあると判つた。この古さでは無論ゴッホは生存中。無名時代であるから、偽作問題など起りようはない。次に落款書体も、贋物師の気のつかないような、特殊なゴッホの癖が出ている。また、絵の裏に発見されたマークから、当初の所蔵者はゴッホの朋友だつた、アルルの牧師ザアユなる人であつたことも突止められました。現所蔵者グエルツ氏の御満足は申すまでもありません。

◎さて、ここで、結論めいたことを附加して、擱筆しようと思ひますが、美術研究を専業とする—例えば美術史学者にとつては、真偽の確認は、研究の基盤として重要問題ですが、これは専門家の問題ですから、ここでは申し述べません。

ただ、一般の美術愛好者としては、多くのものを観て、審美眼を肥やすことは無論望ましいですが、作品の真偽にこだわる必要はないと考えます。料理は味つて旨ければよいので、料理人の名を問題にすることはない。偽物でも時には真物以上、少くとも真物同様のものがあり得るはずで、そんな場合偽物で結構楽しめる訳です。しかも、それは教養人としての活券に障りはありません。要は、悪辣な商人の餌食にならぬことです。